

## 既婚女性における結婚の価値

永久 ひさ子\*

本研究は、結婚の価値がどのようなものであるのか、結婚の価値の変化がどのような社会的文脈の中で生じているかを検討することを目的とした。既婚女性を対象に半構造化面接による調査を行い、60-70歳代・50歳代・20歳代の3世代を分析した結果、[安心で居心地のいい関係][経済的基盤][自己の経験と成長][結婚規範と社会的価値][個人としての自分との折り合い][恋愛結婚]の6カテゴリー・グループが析出された。[恋愛結婚]は50歳代以降にみられ、恋愛結婚が主流になったことが結婚の価値の変化の1要因であると推察された。[経済的基盤]は世代や就業の見通しによってカテゴリーに違いがみられた。[安心で居心地のいい関係]は、世代や就業などによっても違いがみられない価値であることが示唆された。[自己の経験と成長]のうち「子どもを持てる」「家庭役割を持つ」は役割を果たす価値から主体的に選択する価値に変化していることが示唆された。[結婚規範・社会的価値]の中の、結婚規範や適齢期規範に沿った生き方をする価値の変化は経済的自立という社会経済的要因と関連することが示唆された。一方で、親を安心させる、親の期待に応えるなど「親孝行」としての価値は世代にかかわらず全般的にみられた。また、結婚の価値のカテゴリーは、子どもを持つ価値(柏木・永久,1999)と対応すると考えられ、これらは家族を持つ価値を研究する枠組みとして有効であることが示唆された。

Key Words : 結婚, 価値, 世代, 経済的自立, 恋愛結婚

### 【問題と目的】

晩婚化は、近年社会問題となっている少子化の重要な要因である。子どもは結婚してから持つべきという意識があるため、晩婚化で子どもを産み始める年齢が遅くなれば、結果として希

---

\*人間学部心理学科

望子ども数を産まない、産めないケースが出てくるからである。晩婚化の要因について社会経済的視点からは活発に研究され、若年層の経済的要因や出会いの機会の減少などが指摘されているが（例えば、水落,2010; 岩澤,2010）心理学の視点からの研究はほとんどみられない。日本の心理学領域においては、近年、結婚についての研究は活発であるが、ほとんどが結婚後の夫婦における結婚満足度や結婚生活についての研究であり（例えば、伊藤,2004）、結婚することや子どもを持つという、家族を持つ価値に関する研究は少ない。

子どもを持つ価値についての研究では、情緒的満足を子どもに求める「情緒的価値」、子どもを通して親自身の経験や成長を得られるとする「自分のための価値」、子どもを持つことで家族や社会から期待される役割を果たせる「社会的価値」というプラスの価値だけでなく、子どもを持つことによって生じる母親にとってのマイナス要因を回避できる条件に価値を置く「条件依存」「子育て支援」があることが見出された（柏木・永久,1999）。

結婚することは、子どもを持つことと同様、女性にとってプラスの価値だけでなく、時間や経済的自由の制限などマイナス要因も伴う。子どもを持つ選択に際してそれらの価値が勘案されるのと同様に、結婚に際してもそれらが勘案され、自分にとって価値があると判断された時に、結婚が選択されると予測される。したがって結婚は、家族を持つことにどのような価値を認め、自分の生き方に家族をどう位置付けるかという極めて心理学的問題であると思われる。そこで本研究では、今日の日本における結婚の価値がどのようなものであるかを、子どもの価値との関連を含めて考察し、それが年長世代と比べ若い世代でどう変化しているのかを社会経済的文脈の変化の視点から検討する。

家族を持つことは、個人にとって多くのプラスの価値を持つが、同時に負担や制限が増えるなどのマイナス要因も含まれる。結婚による行動の自由の制限というマイナス要因は、とりわけ家庭役割の責任者とみなされる女性において大きくなる。さらに、自由の重要性が高い女性ほど、そのマイナス要因を低減させる価値、すなわちマイナスの価値が重要になると予測される。そこで本研究では、女性にとっての結婚の価値に焦点を当てることにする。

結婚によるプラスの価値、マイナスの価値は個人的要因によって異なると同時に、社会経済的要因との密接な関連が推測される。例えば、結婚が経済的基盤を得る手段である場合と経済的自立が可能な仕事を持ちそれに多くの時間を要する場合は、結婚のプラス・マイナスの価値は異なると推測できる。社会環境の変化に結婚に対する意識の変化が追い付かないことが結婚難の主要な要因であるとの主張があるように（山田,2000）、女性の経済的自立が困難であった世代と経済的自立が可能になった世代間では結婚の価値が異なることが予想される。そこで、女性の経済的自立が困難だった60-70歳代、女性の就労が一般的になりはじめた50歳代、女性も経済的自立が可能になり専門職に就くケースも増えた20歳代の3世代を対象に調査を行う。また、結婚のプラス・マイナスの価値は、結婚を想定しての回答よりも、実際に結婚を選択した理由の方により現実的に反映されると考えられる。そこで本研究では、結婚の理由を結婚に認める価値とし、既婚者を対象に調査を行うことにした。

結婚意欲や結婚の利点については社会調査が継続的になされている（例えば国立社会保障・人口問題研究所,2011）。しかし、調査項目が少ないために、結婚の価値がどのような状況から生じているかについて検討する資料とするには不十分である。本研究では、結婚の価値の違いを生じさせる社会経済的文脈についても検討するため、質的調査を行うこととした。

以上のことから、本調査では、結婚の価値のカテゴリーを析出し、その特質を女性の社会経済的文脈との関連と子どもの価値との比較から検討することを目的とする。

## 【方法】

**調査協力者** 調査目的が結婚についてであることを説明した上で、知人に紹介を依頼した。依頼内容は、結婚についてのインタビューであることを承諾済みであることと年齢範囲であった。年齢範囲は70歳代-20歳代を対象とした。最終的に46名の男女に面接を行ったが、本研究では既述の理由から、70歳代1名、60歳代1名、50歳代4名、20歳代2名、30歳代1名の合計9名の既婚女性を分析対象とした（Table1）。

Table1 調査協力者のプロフィール

対象者No.	年齢(調査時)	きょうだい	学歴	結婚年齢	結婚時の職業 仕事への思い	結婚時の仕事の見通し	切片数
70a	79	3人姉妹の長女	高校	24	自営 家業を継ぐ責任がある	家業を継続	47
70b	65	兄と妹	専門学校	24	看護師 ずっと働ける職場	一時退職しても復帰可能	30
50c	52	兄と妹	大学	26	一般職 長く働けるし面白い	子育て一段落後に再就職	41
50d	52	2人姉妹の長女	大学	25	一般職 長くやる仕事ではない	専業主婦	43
50e	59	兄2人姉1人	大学	29	一般職 長く働けるし面白い	子育て一段落後に再就職	63
50f	56	なし	大学	27	一般職 同僚も後輩も寿退社	専業主婦	52
20g	26	なし	大学	24	一般職 仕事を変わりたい	子育て一段落後に再就職	80
20h	29	姉	大学	27	一般職 今やめても惜しくない	子育て一段落後に再就職	39
30i	31	妹	大学院	28	専門職 やっとここまで来た	結婚出産後も継続	34

**調査手続き** 2011年2月から11月にかけて個別の面接調査を行った。面接は協力者が指定する場所（喫茶店など）で、筆者が実施した。調査開始前に調査の趣旨と録音や結果の公表についての同意を得た上で内容を全て録音した。まず、年齢や結婚年齢、父母の年齢、学歴、きょうだい関係などについての調査用紙に回答を求めた後、全員に共通する質問を行った。面接は1人約1時間から1時間半、半構造的面接方法で行い、必要に応じてさらに詳しく話してもらった。面接後に逐語録を作成した。

**調査内容** 全員に共通の質問内容は以下の通りである。

①独身の頃の生活、および、その頃結婚とはどのようなものだと思っていたか ②結婚しようと思ったのはどのような理由からか ③結婚するとできなくなるがあると思ったか、ど

んなことはできなくなりそうだったか ④その相手と結婚することを決めたのはどういう理由からか ⑤その相手より前に交際していた人はいたか、その人と結婚しなかったのはどういう理由からか ⑥同棲についてどう考えるか、である。

データの分析 質的データの分析方法には様々なものがあるが、手続きが最も体系化されていることから、グランデッド・セオリー・アプローチ（Strauss & Corbin,1990 南監訳,1999）を援用して行った。具体的には以下の手順で分析を進めた。①逐語録から結婚に関連する部分を抜き出し、内容ごとに切片化した。②切片化したデータの意味を解釈し、それを概念として用い、切片化したデータのラベル名とした。③カテゴリー生成：まず70—60歳代2名のデータについて、②で得られた概念同士を比較し、似た内容同士をまとめ、そのまとまりに名前をつけてカテゴリーを生成した。同一カテゴリーの中に、異なるレベルや異なる方向性などさらなるまとまりがみられた場合には、サブカテゴリーを作成した。④カテゴリー同士を比較し、内容的にさらに上位のまとまりがみられる場合には、カテゴリー・グループ（C・G）を作成した。⑤カテゴリーの精緻化：新しいデータを追加するごとに、既存のカテゴリーによるそのデータの説明を試み、困難な場合には新たなカテゴリーを生成した。また、既存のカテゴリーを統合、分解し、新たなカテゴリーを生成することで説明できる場合には、カテゴリーの再編成を行った。その結果、C・Gを変更する方がよりよく説明できると判断した場合には、C・Gの変更も行った。この手順を50歳代4名について行い、次に20歳代2名のデータを追加して行った。⑥新たな30歳代1名のデータを追加して、既存のカテゴリーの修正、追加の必要がないと判断されたところで分析を終了とした。⑦仮説生成：生成されたカテゴリー間の関連から、「女性の就業はどのようにして結婚の価値を変化させるのか」を説明する仮説を生成した。

調査協力者のプロフィールと切片化したデータ数はTable1の通りである。

## 【分析過程】

### 1. 既婚女性における結婚の価値カテゴリー析出のプロセス

GTAではデータ収集と分析が同時並行で行われ、それを1ステップとする。本研究では、3つのステップで分析を行い、世代を基準として、ステップが進むごとに若い世代のデータを増やす形で分析を進めた。

#### (1) ステップ1：60-70歳代既婚女性2名のラベルから作成したカテゴリー

これ以降、[ ]はC・Gを示し『 』はカテゴリー「 」はサブカテゴリー、“ ”は概念ラベルを示す。

目的 女性の就業が困難だった60-70歳代女性の結婚の価値の生成を行い、結婚の価値の変化を社会経済的文脈の変化から理解する。

結果 2名のデータから生成した概念ラベルから、以下の20のカテゴリーと5つのC・Gが生成された（Table2）。

Table 2 「女性が結婚する価値」カテゴリー (60-70代既婚女性)

カテゴリーグループ	カテゴリー	サブカテゴリー	概念ラベル	カテゴリーの定義
安心できる生活	親も知り合い		昔から知り合いだった	実家の親も知り合いで安心
	縛られない生活		自分を縛らない	縛られず、自由に生活できる
経済的基盤	姑に仕える不安		姑に仕える不安	姑に仕えるのははじめが不安
	安定した生活		真面目でよく働く	真面目でよく働く
自己の経験と成長	結婚による経済的安定		女性は長くは働けない 豊かな生活のための打算 生活の安定優先	経済的に自立できない女性にとって生活の安定は、結婚の重要な目的
	経済的には自立可能		看護婦は一人でも食べていける	経済的に自立可能だと独身でも大丈夫
	自分の家庭を築ける		憧れの家庭を作れる	自分が望む形の家庭を築ける
	成長の契機としての経験		やったことがない事はする方がいい	結婚子育てが成長の契機になる
	家庭役割をもつ		家事は好きだった 家事育児を女性がやるのは当然 嫌ではなかった	家事を自分が引き受けることは当然だし、嫌ではなかった
結婚規範・社会的価値	結婚意欲		いい人がいれば結婚する	結婚したいという気持ちがある
	生活の変化の不安		外に出るより実家の方が気楽	嫁に行くより生活が大変になる
	親孝行		親の望み通りにする 嫁に出して一人前にするという 母の願いを叶えるのも親孝行	結婚することは親の願いであり、それを叶えるのは親孝行のひとつ
	適齢期規範	適齢期に結婚が普通	世間体 親からの結婚圧力 適齢期に見合いを持つてくる	適齢期での結婚は世間体であり、親が見合いを持つてくるなど、圧力をかけられる
結婚規範・社会的価値		年齢にこだわらない	適齢期でも焦りはない 周囲に独身が多い	年齢にこだわりのない女性もいた 周囲に独身がいると焦らない
	周囲に独身が多く焦らない		周囲に独身が多い	周囲に独身がいると焦らない
	結婚規範	結婚が当然・普通 いい人がいれば結婚	結婚するのが当然・普通 結婚は絶対ではない	結婚するのが当然・普通
	子どもを産む役割		子どもを産むのは女性の役割 男子を産む価値	子どもを産むのは女性の役割であり、特に男の子を産むことの価値は高い
	親への責任	親の面倒をみる責任 家業を継ぐ責任	親の面倒をみるのは自分の使命 親は実家の店を継いでほしかった お嫁に行ったらもう帰れない	親の面倒をみる責任が果たせるような結婚 実家の仕事(自営業)を継続 結婚したらもう実家には帰れない
個人としての自分との折り合い	結婚したら戻れない		お嫁に行ったらもう帰れない	結婚したらもう実家には帰れない
	仕事はまた見つかる		働きたくなったらまた働ける	断念の方略
	独身は十分楽しんだ		大体やりたいことはやった 独身に未練はなかった	結婚前に十分遊んだので、未練なく結婚する

①『親も知り合い』『縛られない生活』『姑に仕える不安』『安定した生活』のカテゴリーからC・G [安心できる生活] を生成した. ②『結婚による経済的安定』『経済的に自立可能』からC・G [経済的基盤] を作成した③『自分の家族を築ける』『成長の契機としての経験』『家庭役割をもつ』『結婚意欲』『生活の変化の不安』からC・G [自己の経験と成長] を生成した④『親孝行』『適齢期規範』『周囲に独身が多く焦らない』『結婚規範』『子どもを産む役割』『親への責任』『結婚したら戻れない』からC・G [結婚規範・社会的価値] を生成した. 『適齢期規範』には「適齢期に結婚が普通」「年齢にこだわらない」を生成した. 『結婚規範』には「結婚が当然・普通」「いい人がいれば結婚」を生成した. 『親への責任』には「親の面倒をみる責任」「家業を継ぐ責任」を生成した. ⑤『仕事はまた見つかる』『独身は充分楽しんだ』からC・G [個人としての自分との折り合い] を生成した.

考察 概念ラベルとカテゴリー間の関連から、この世代では「女性は長くは働けない」ため『結婚による経済的安定』に価値があり『結婚規範』『適齢期規範』に合わせた生き方に価値が認められるが、『経済的に自立可能』である場合には、「いい人がいれば結婚」と結婚は絶対ではなく、結果的に「年齢にこだわらない」ことが理解できた. また、経済的自立が可能な職場には『周囲に独身が多く焦らない』ことも、結婚規範や適齢期規範を緩める方向に働くことが理解できた.

(2) ステップ2：50代既婚女性5名のデータを追加し、修正・追加されたカテゴリー

目的 女性の就労が可能になるものの、まだ経済的自立は一部の女性に限られる世代のデータを追加してカテゴリーの精緻化を行う (Table3).

結果 ① [安心できる生活] の『親も知り合い』には、“実家の親も大事にしてくれる”が追加されたため、『自分の親も含めた家族になれる』に修正した. 『縛られない生活』は、“自

Table3 「女性が結婚する価値」カテゴリ（70代・50代既婚女性）			
カテゴリグループ	カテゴリ	サブカテゴリ	概念ラベル
安心感と居心地のいい関係がもてる	自分の親も含めた家族になれる 自分を尊重してくれる		実家の家族ともいい関係 実家の親も大事にしてくれる
			自分を縛らない 自分を支えてくれる 自分の意見を聞いてくれる したいようにさせてくれる
		安心できる関係	真面目でよく働く 安定した関係がもてる 安心できる関係がもてる 信頼できる関係がもてる
		居心地のよさ	自然な自分でいられる 居心地がいい 一緒にいて楽しい
		頼れる人ができる	頼りがいがある安心 引っ張って行ってくれる 二人で支え合える
		結婚しないかと将来孤独 結婚による経済的安定	女性には経済力がない
経済的基盤		相手の経済力への安心感	生活の安定 経済的に安心 経済的にはなんとかなる 一流企業に勤めていた 一歩いでも食べていける
	経済的自立 自分の家庭を築ける		自分の家族を作る 自分の家族を築き上げていく 相手が親から自立している 問題があっても積み上げていく生活
	子どもを育てる	子どもを産む役割 子育てがしたい	子どもを産むのは女性の役割 男子を産む価値は高い 子どもを持ちたい 子育てがしたい
自己の経験と成長	家庭役割をもつ	家事育児は女性の役割 家事育児は自分が引き受ける	家事育児を女性がやるのは当然 家事育児は自分が引き受ける 家族を支えることが自分のステイタス
	新しい生活	家事育児は夫と分担 新しい生活への期待	相手も家事ができる 今の生活を変えられる 新しい場所での生活への期待 外に嫁に行くより実家の方が気楽 姑にいじめられる不安
		相手の経験や成長の同一視	満足して結婚で生活を変えたくない 相手の仕事を自分の経験のように感じられる 夫婦は利害が一緒
	成長の契機としての経験	結婚・子育てで成長する 親のようになれる 親からの自立	やったことがない事はする方がいい 結婚子育てで成長する 仲のいい両親のようになりたい 仕事も自立した母のようになりたい 結婚で親から自立する・親と対等になる 結婚で自分の経済を持つ
	親孝行		親の望み通りにする 嫁に出して一人前にするという 母の願いを叶えるのも親孝行 一生独身で行くことを心配していた 将来一人になることを親が心配
	親からの結婚期待		親からの結婚圧力 親からの結婚期待
結婚規範・社会的価値	適齢期規範	適齢期に結婚が普通	世間体 適齢期に見合いを持つてくる 適齢期のうちに結婚すべき オールドミスは嫌がれる
	友人の結婚	結婚できない不安 年齢にこだわらない 周囲に独身が多いと焦らない 周囲の結婚退職で焦る	結婚できないのではないかと不安 年齢のこだわりはなかった 周囲に独身が多いと焦らない 友人の結婚で焦る 周囲の結婚退職で焦る
	結婚規範	結婚するのが当然・普通	結婚するのが当然・普通 結婚以外に選択肢を思いつかない
	親の面倒をみる責任	親の面倒をみる責任 家業を継ぐ責任	親の面倒をみるのは長女の自分の使命 親の面倒をみるのは一人娘の自分 親は実家の店を継いでほしかった お嫁に行ったらもう帰れない
	個人としての自分との折り合い	結婚したら戻れない 仕事との両立のしやすさ 独身は十分楽しんだ	職場の近くに住むなら続けてた 仕事も持てる結婚生活 結婚退職してもまた働ける 遊ぶことはもう良しとした 元々遊ばなかった
	恋愛結婚	恋愛のゴール 好きな人と会う手段 相手に切望された 結婚のための恋愛	好きな人と一緒に生活したい 好きな人と深く仲好くなる 結婚は責任のある関係 好きな人と一緒にいる手段 相手の熱意に押された 結婚願望が強い 結婚したいという気持ちがある時に合った

注：斜字は、50歳代で新たに追加された内容

分の意見を聞いてくれる” “したいようにさせてくれる” “自分を支えてくれる” が追加されたため『自分を尊重してくれる』に修正した。『安定した生活』には“安定した関係がもてる” “安定した関係がもてる” “信頼できる関係がもてる” が追加されたため『安心できる関係』に修正した。“自然な自分でいられる” などから成る『居心地のよさ』, “頼りがいがある” などから成る『頼れる人ができる』, 『結婚しないと将来孤独』が新たに追加された。カテゴリーの修正・追加に伴い, C・G名を [安心で居心地のいい関係] と修正した。② [経済的基盤] の, 『結婚による経済的安定』に「女性には経済力がない」と「相手の経済力への安心感」を生成した。③ [自己の経験と成長]: 新たに『子どもを持てる』『家庭役割を持つ』『新しい生活』を生成した。『子どもを持てる』のサブカテゴリーに変更し, 新たに生成した「子育てがしたい」とともに『子どもを産む役割』を生成した。「家事育児は女性の役割」, 家事育児への積極的態度の「家事育児は自分が引き受ける」, 「家事育児は夫と分担したい」から構成される『家庭役割をもつ』を生成した。「新しい生活への期待」「生活の変化への消極的態度(『生活の変化の不安』を統合)」「相手の経験や成長の同一視」から構成される『新しい生活』を生成した。『生活の変化への不安』には“生活に満足していたので結婚で生活を変えたくない”を加えたため, 「生活の変化への消極的態度」に修正し, 『新しい生活』のサブカテゴリーとした。「結婚・子育てで成長する」「親のようになれる」「親からの自立」が生成されたため, 『成長の契機としての経験』のサブカテゴリーとした。『結婚意欲』は“結婚したいという気持ちがある時に出会った”などのラベルが生成されたため, 『結婚のための恋愛』と修正し [恋愛結婚] に変更した。④ [結婚規範・社会的価値] では, 『適齢期規範』に「結婚できない不安」を生成した。また, “親からの結婚圧力”を新たに生成された“親からの結婚期待”と統合し『親からの結婚期待』を生成した。『周囲に独身が多いと焦らない』に「周囲の結婚退職で焦る」を統合して再編成し『友人の結婚』を生成した。⑤ [個人としての自分との折り合い] には, “結婚退職してもまた働ける”など仕事と両立できる結婚に価値があるとするラベルが生成されたことから, 『仕事をするなら職住接近』を統合して再編成し, 『仕事との両立のしやすさ』を生成した。⑥ 「好きな人との生活」「好きな人と会う手段」「相手に切望された」から構成される『恋愛のゴール』と, 結婚するために恋愛するという内容の『結婚のための恋愛』を生成し, それらから構成される [恋愛結婚] を生成した。

**考察** 新たに [恋愛結婚] が生成されたのは, この世代における恋愛結婚の一般化の反映と理解できる。また, 恋愛結婚の中には, 『恋愛のゴール』として結婚がある場合と, 『結婚のための恋愛』があることがわかった。[安心できる生活]が[安心感と居心地のいい関係がもてる]へと修正されたのは, 結婚がお互いの人格の魅力に基づく恋愛の延長上になったためと理解することができるだろう。しかし, 恋愛は必ずうまくいくとは限らず, いつ結婚になるかが不明であるため, 結婚規範や適齢期規範にも価値が置かれる場合には「周囲の結婚退職で焦る」「このまま結婚できない不安」がみられるのであろう。結婚規範に価値がおかれていたのは, 50歳代が適齢期を迎えた時期には, まだ女性の経済的自立が困難だったことと関連すると思われ

る。『新しい生活』からは、自分では海外への転勤や社会で活躍することができない女性が、結婚相手の活躍に同一視し、結婚によってそれを得ようとしたのであろうことがうかがえる。しかし「新しい生活」は、現在の仕事や生活に満足している女性にとっては「生活の変化への消極的態度」につながると推察される。

(3) ステップ3：20歳代の2名のデータを追加し、修正・追加されたカテゴリー（Table4）

Table 4 「女性が結婚する価値」カテゴリー（60-70代・50代・30-20代の既婚女性）

カテゴリー・グループ	カテゴリー	サブカテゴリー	概要レベルの例		
安心で居心地のいい関係	安定した関係	信頼に基づく安定した関係	70a 真面目でよく働く		
		70a 安定した関係がもてる			
	頼れる人ができる	頼りがいがある人に頼れる	50c 50d 50f 安心できる関係がもてる	50c	
			50d 50e 信頼できる関係がもてる	50e	
		二人で支え合える	50d 50e 結婚生活が破綻しなそう・浮気をしなそう	20g	
			20g 20h 長続きする関係	20h	
		居心地のよさ	結にいいめられる不安	50f 頼りがいがある安心・守られて生きられる	50f
				50d 引っ張って行ってくれる	50d
			二人で支え合える	50e 二人で支え合える	50e
				50d 一人で生きていくのは大変	50d
結にいいめられる不安	20g 一人っ子なので両親が死んだら一人になる		20g		
	50f 一人っ子なので結婚できないと将来孤独		50f		
経済的基盤	結婚による経済的安定	70a 女性には経済力がない	70a		
		70a 50d 生活の安定が優先	70a		
	経済的自立可能	50d 結婚は永久就職	50d		
		50d 女性は経済力がない	50d		
	経済的責任の共有	相手の経済力への安心感	50d 経済的にはなんとかなる		
		50c 50e 50f 3高だった	50c		
	自分の家歴を築ける	20g 20h 30i 一流企業に勤めていた	50e		
		20g 20h 30i 正社員だからアルバイトよりいい	20h		
	自己の経験と成長	子どもを産む	70b 相手自身が自分の友達とも仲良くできる	70b	
			70b 一生一人でも生きていける	70b	
子どもを産む		70b 何かの時には自分も働いて家族を支える	20g		
		20g 20h 30i 二人で働いて家計を成り立たせる	30i		
子どもを産む		70b 自分の家族を作れる	70b		
		50d 自分の家族を築き上げていく	50d		
子どもを産む		50c 相手が親から自立している	50c		
		50e 問題があっても積み上げていく生活	50e		
子どもを産む		70a 子どもを産むのは女性の役割	70a		
		70a 男子を産む価値	70a		
子どもを産む	50c 子どもを持ちたい	50c			
	20g 子育てがしたい	20g			
子どもを産む	70a 家事育児を女性がやるのは当然	70a			
	50f 家事育児は自分が引き受ける	50f			
子どもを産む	50d 家族を支えることが自分のステータス	50d			
	20h 家事育児を自分が引き受けることにポジティブ	20h			
子どもを産む	50c いずれは家事は自分がメインでやっていく	50c			
	50d 今の生活を変えられる	50d			
子どもを産む	50d 50f 新しい場所で生活できる	50d			
	20g 仕事を渡えられる	20g			
子どもを産む	50d 自分ができない経験を聞き疑似体験できる	50d			
	70a 外に嫁に行くより実家の方が気楽	70a			
子どもを産む	70a 生活に満足していて結婚で生活を変えたくない	70a			
	50e	50e			
子どもを産む	70b やったことがないことはする方がいい	70b			
	50c 結婚・子育てで成長する	50c			
子どもを産む	50c 親のいい両親のようにになりたい	50c			
	50e 仕事と子育てをした母のようにになりたい	50e			
子どもを産む	50d 結婚で親から自立する	50d			
	50d 結婚で自分の経済をもてる	50d			
子どもを産む	20h 30i 結婚で実家を出られる	20h			
	30i	30i			

結婚規範・社会的価値	親孝行	70a 70b 50c 50e 50f 20g 20h	70a 親の望み通りにする 嫁に出して一人前という母の願いを叶える 一生独身で行くことを心配していた 50e 将来1人になることを親が心配 50f 赤ちゃんを見せる方が親は喜ぶ 20g 結婚は自分のためだけではない 20h		
	親からの結婚期待	70a 70b 50c 50d 50e 50f 30h	50c 親からの結婚圧力 50f 親からの結婚期待		
	結婚規範	結婚するのが当たり前 70a 50c 50d 50f 20g いい人がいればするし、しなくてもかまわない 70b 50e いつかはするだろう 20h 30i	70a 結婚するのが当然・普通 50f 結婚以外に選択肢を思いつかない 70b いい人がいれば結婚する 50e 姑が独身だったので、しないのもあり 20h いつかはするんだろうなと思っていた 30i		
	けじめとしての結婚	結婚したら戻れない 70a お互いの家族になれる 50d 50f 20g 20h 結婚してから同居 20g 20h 30i 子どもは結婚してから 20g 20h 法的に守られる関係 20h 30i	70a お嫁に行ったらもう帰れない 50d 実家の家族ともいい関係 20g 嫁に行くのではなく一緒に家族になる 20f お互いの家族と一緒にやっていける 20h 結婚というけじめをつけてから同居すべき 30i 一緒に住むからには籍を入れるよう親が言う 20g 結婚前に妊娠では親がショックを受ける 20h できちゃった結婚では子どもがかわいそう 20h 役所の手続きなどで代行できて便利 30i 相手の浮気などの際に法的に守られる		
	適齢期規範	適齢期に結婚するのが普通 70a 50c 50f 適齢期でも焦りはない 70b 50e 目安としての適齢期 50e 20g 20h	70a 世間体 50a 適齢期に見合いを持つてくる 50f 結婚できない不安 70b 適齢期でも焦りはない 50e 結婚するとしても25は過ぎたろうと思った 20g 結婚は30歳まででこでたらいい 20h 結婚は30歳過ぎてからでまればしい		
	友人・親戚が基準	70b 50c 50f 20g	50f 周囲がみんな結婚退職していった 50e 姑が独身だったので当然とは思わなかった 70b 周囲に独身がいると焦らない 20g 親戚に未婚がいないと結婚が当然になる		
	親への責任を果たす	親の面倒をみる責任 70a 50f 20g 30i 家業を継ぐ責任 70a	70a 親の面倒をみるのは長女としての使命 30i 親は実家の店を継いでほしかった		
	個人としての自分との折り合い	仕事との両立の可能性	両立してきた母親がモデル 50c 50e 20g 20h 資格や制度による見直し 70b 30i	50c 母のように仕事も持てる結婚生活 20h 母のように子育ても仕事も地域のこともできる 70b 結婚でやめても、仕事はすぐまた見つかる 30i 産休育休を取って復帰	
		自分が尊重される	自由や意見が尊重される 70a 70b 50c 50e 50f 20g 20h 30i 働くかどうかを自分で選べる 70b 50c 50e 20g 20h 30i	70b 自分を縛らない 50c 自分を支えてくれる 20h 自分の意見を聞いてくれる 70b したいようにさせてくれる 20g 働くかどうか自分で選べる 40i 自分が言ったことを尊重してくれる	
		独身は十分楽しんだ	70a 70b 50c 50d 目標を達成してから結婚 20h 30i	70a 大体やりたいことはやったから 50c 遊ぶことはもうよしとした 20h 今仕事を辞めてもそんなに構しくない 30i 受験勉強に専念するために別れた	
		恋愛結婚	恋愛のゴール	好きな人との生活 50d 50e 50c 20h 好きな人と会う手段 50d 50e 相手に切望された 50d 50f 20g 30i	50d 好きな人と一緒に生活したい 50e 相手と深く仲好くなれる 50d 遠距離の好きな人と一緒にいる手段 30i 相手の熱意に押された
			結婚のための恋愛	50c 50d 20g	50c 結婚したいという気持ちの時に周囲にいた 20g 結婚前提でしか付き合わない

注: 斜字は、20歳代と30歳代で新たに追加された内容。数字とアルファベットは発言のあった協力者。

目的 さらに若い世代のデータによるカテゴリーの精緻化と洗練を行う。

結果 ① [安心で居心地のいい関係]: 『頼れる人ができる』に「頼りがいのある人に頼れる」 「二人で支えあえる」を生成し、『結婚しないと将来孤独』をサブカテゴリーに変更した。『居心地のよさ』に「姑にいじめられる不安」「居心地よく楽しい」を生成した。『自分の親も含めた家族になれる』は、“嫁に行くのではなく一緒に家族になる” “お互いの家族と一緒にやっっていける”を追加したため「お互いの家族になれる」に修正し、[結婚規範・社会的価値]に変更した。② [経済的基盤]には、“何かの時には自分も働いて家族を支える”が生成された

め『経済的責任の共有』を生成した。③[自己の経験と成長]には、カテゴリー、サブカテゴリーの修正・追加・再編はなかった。④[結婚規範と社会的価値]では、『結婚規範』に「いつかはするだろう」を生成した。これは既存の「いい人がいればするし、しなくてもかまわない」よりも結婚へのコミットメントが低いサブカテゴリーである。『結婚したら戻れない』に、新たに生成した「結婚してから同居」「子どもは結婚してから」を統合してカテゴリーを再編成し『けじめとしての結婚』を生成した。また、『お互いの家族になれる』は『結婚したら戻れない』と共に実家との関係についての内容であることから、このカテゴリーのサブカテゴリーに変更した。『適齢期規範』に「目安としての適齢期」を生成した。『友人の結婚』は、“親戚に未婚がいないので結婚するのが当然だと感じる”を生成したため、『友人・親戚が基準』に修正した。⑤[個人としての自分との折り合い]には、“(やりたかった仕事はひととおりのりで)今仕事を辞めてもそんなに惜しくない”が追加されたが、遊びや恋愛が中心の『独身は十分楽しんだ』とは内容が異なるため、『目標を達成してから結婚』を追加した。また『仕事との両立の可能性』には、「両立してきた母親がモデル」「資格や制度による見通し」が生成された。『自分が尊重される』には「働くかどうかを自分で選べる」が生成されたことから、C・Gを[安心で居心地のいい関係がもてる]から[個人としての自分との折り合い]に変更した。

⑥[恋愛結婚]には変更はなかった。

(4) 新たに30歳代のデータを加えたところ、ここまでのカテゴリーとサブカテゴリーで説明が可能であったことから、これらのカテゴリーとサブカテゴリーは、既婚女性における結婚の価値のカテゴリーとして有効な枠組みであると判断し分析を終了した。

独身者の結婚の利点の調査で用いられている項目（国立社会保障・人口問題研究所,2011）と比較すると、「精神的安らぎの場が得られる」「経済的余裕が持てる」「子どもや家族を持てる」「親や周囲の期待に応えられる」「社会的信用を得られる」「親から独立できる」「愛情を感じている人と暮らせる」「生活上便利になる」「性的充足を得られる」であり、これらは本研究のカテゴリーとサブカテゴリーにほぼ含まれることから、結婚の価値を網羅した一定の妥当性のあるカテゴリー・グループとカテゴリーであると判断した。

## 2. 析出された結婚の価値カテゴリーの特質

生成されたカテゴリー・グループとカテゴリーについて、その特質をまとめると以下のようになる。

①[安心で居心地のいい関係が持てる価値]は、『安定した関係』『頼れる人ができる』という安心感と、『居心地よく楽しい』から構成されていた。結婚には安心感や居心地のよさという情緒的満足の価値があると考えられる。『頼れる人ができる』は「頼りがいのある人に頼れる」「二人で支えあえる」「結婚できないと将来孤独」のサブカテゴリーから構成されている。『居心地のよさ』は「姑にいじめられる不安」「居心地よく楽しい」から構成されている。

『居心地のよさ』は50歳代以降の世代で「居心地良く楽しい」に価値を認めるのに対し、70代が「姑にいじめられる不安」を感じたのは対照的で、この間に伝統的家族意識が大きく変わっ

たためと考えられる。若い世代の“相手が自分の友達とも仲良くできる”“好き過ぎると疲れて結婚はできない”にみられるように、結婚が規範や家同士のつながりから、友達や恋人関係の延長になったという質的变化がうかがえる。

② [経済的基盤] は、『結婚による経済的安定』『経済的自立可能』『経済的責任の共有』から構成されていた。『結婚による経済的安定』の「女性には経済力がない」は20歳代にはみられなかったが、「相手の経済力への安心感」は若い世代でもみられた。このことから、「相手の経済力への安心感」は、経済的に自立可能でない場合には世代に関わらず重要な価値であると考えられる。一方で、20歳代では全員が『経済責任の共有』の認識を持っていた。ここには、社会経済的状况の変化が関連するものと推察できる。50歳代が結婚した時代には“3高だった”に象徴されるように、高学歴であれば有名企業の社員になれて高収入という仕組みが安定していた。しかし20歳代では、“(一流企業でも)何かの時”がある可能性がある時代になり、正社員でも給与が“アルバイトよりはいい”のも一般的になった。しかも、若い世代は女性でも男性に近い給与を得ることができることから『経済的責任の共有』がみられたのであろう。このように、経済的基盤の価値は社会経済的状况に伴って変化するものと考えられる。

③ [自己の経験と成長] は、『自分の家族を築ける』『子どもを持てる』『家庭役割を持つ』という新たな役割を獲得する価値、『新しい生活』『成長の契機としての結婚』という新たな生活経験や自己の成長の価値から構成されていた。つまり女性の結婚には、新たな役割の獲得、新たな生活の経験、親から自立して自分の家族を作るなど、個人の発達上の価値があることが理解できた。しかし結婚による新たな経験は、必ずしも積極的に受け止められるわけではなく、現在の生活に満足している場合には『生活の変化への消極的態度』につながる可能性があることも示唆された。『自分の家族を築ける』『子どもを持てる』『家庭役割をもつ』という新たな役割の獲得の価値はどの世代にもみられ、世代共通にみられる価値といえる。しかし新たな役割の獲得への主体性に世代間の変化がうかがわれる。『子どもを持てる』の「子どもを産む役割」がみられたのは70代のみで、50歳代以降では「子育てを経験したい」という主体的価値がみられた。家庭役割を担う価値についても、70歳代は「女性の役割」であるのに対し、50歳代以降は一人を除いてより主体的であり「夫と分担」もみられた。若い世代ほど、女性に割り当てられた役割を果たすという態度から、自分が価値を認めた役割を主体的に担う態度へと変化していると推察される。

④ [結婚規範と社会的価値] は、『親孝行』『親からの結婚期待』『親への責任を果たす』という親の期待に応える価値、『結婚規範』『適齢期規範』『友人・親戚が基準』という社会の基準に沿った生き方の価値、『はじめとしての結婚』という3側面があることが示唆された。『親孝行』『親への責任を果たす』は世代に関わらずみられた。これは、親の期待に応えたいとする心理的傾向が社会的要因よりも親子関係の良さなどの個人的要因と関連することによると思われる。一方で、社会の基準に沿った生き方の価値には社会経済的要因との関連が示唆された。『結婚規範』は全ての世代でみられたものの、女性が長く働ける職場にいた70bや50eは、“同

僚に独身が多い”，“姉が独身であった”ことを挙げ、結婚を当然とは思わず，“適齢期に焦りがなかった”と発言している。また、友人や親戚など周囲の結婚行動が基準になることから、女性が長く働ける職場では独身の同僚が多く、結婚年齢へのこだわりが弱くなることが示唆された。『はじめとしての結婚』は70歳代では、「結婚したら帰りたいも帰れない」という文脈で語られているのに対し、若い世代では「お互いの家族になれる」というように、結婚によって両家の間の行き来が自由になるという文脈に変化している。一方で、「法的に守られる関係」という、同棲や浮気による関係の解消困難性など恋愛の延長上に区切りをつける価値を挙げたのも若い世代であった。また「同居、子どもは結婚してから」というように、結婚によって二人の間でできることが広がるという価値も認識されていた。

⑤【個人としての自分との折り合い】は、『仕事との両立』『自分が尊重される』という、家族の中で個としての自分を持ち続けられる価値と、『独身は十分楽しんだ』『目標を達成してから結婚』という、個人としての生活に区切りをつけてから結婚する価値から構成されていた。『仕事との両立の可能性』は、「仕事と家庭を両立してきた母親がモデル」「資格や制度による見通し」から構成されていた。一方で、「働くかどうかを自分で選べる」価値も若い世代で認識されていた。若い世代ほど両立してきた母親が増え、資格を取る割合も働き続ける制度も整う。しかしながら、「働くかどうかを自分で選べる」結婚に価値を認める場合、それを可能にする経済的基盤が必要となるために、若い世代でも「相手の経済力への安心感」が重要になるものと考察できる。『目標を達成してから結婚』は若い世代のみにみられた。20hは、大学卒業後自分が目指す仕事に就くため何度か仕事を変わり最終的に自分の目標を達成した。ひととおりやってみたとところで、この会社で先は望めないと判断を下し、“今仕事を辞めても、もうひととおりやったので惜しくない”と結婚を選択している。また30iは専門職に就くための勉強を続けている最中に結婚を申し込まれたが、大学院受験からずっと努力してきた目標であり、それを達成するまでは結婚はできないと結婚を選択しなかった。つまりこのサブカテゴリーは、女性が仕事に目標を持てるようになったことの反映であり、女性の高学歴化と長期間の就業が可能になったり専門職化が進んだという社会経済的変動に伴って生じた価値ということができらう。

⑥【恋愛結婚】には、「好きな人との生活」「好きな人に会う手段」「相手に切望された」という、恋愛の自然の帰結として結婚になったという『恋愛のゴール』と、結婚という目的のために恋愛するという『結婚のための恋愛』があることが理解できた。近年の見合や婚活と呼ばれる出会いは後者である。『恋愛のゴール』に価値を認めつつも、一定の年齢までに結婚すべきという『結婚規範』が内面化されている場合や、『子どもを持てること』に価値を認める場合、『恋愛のゴール』と『結婚のための恋愛』の間で葛藤があることが予測される。

### 3. 結婚の価値の変化と女性の就業

本研究では、結婚の価値の変化が、女性の就業と関連することが示唆された。年長世代であつ

でも看護師で経済的に自立可能であった70bは、一人でも一生食べて行かれるため、結婚は“しなくてはいけないものではなく、やったことがないことはやってみた方がいい、くらい”であり“職場には独身の先輩が沢山いたので”結婚や結婚年齢へのこだわりがなかった。また“結婚で一度やめても仕事をしたくなったらいつでも見つかる”ので、“自分を家に縛らずやりたようにさせてくれる”価値を重視した。一方、結婚後の就労の将来展望を全く持たなかった50dは、経済的安定の価値は高いものの、行動や生き方の自由には価値を置いていなかった。50cは、結婚後に母親と同じくパート的に仕事をする将来展望を持っていた。そのため、経済的安定と、働くかどうかを自分で選択でき、自由や意見が尊重される価値を重視していた。これらは、結婚後の就業に関する将来展望が、結婚にどのような価値を重視するかと関わることを示唆している。

また、女性の就業は、結婚規範や適齢期規範に沿った生き方の価値を変化させることが示唆された。一般企業の事務職であった50c、50fは、適齢期に友人や同僚、後輩までがどんどん結婚退職していくために、適齢期を意識し焦りを感じ、結婚できない不安まで経験した。一方、既述の70bは、結婚規範にも適齢期規範にも価値をおいていなかった。ここには、経済的自立以外に、“職場には独身の同僚や先輩が多くいたため結婚しなくてはならないとも思わず、適齢期を意識することもなかった”点が挙げられる。経済的自立には、女性が長期間働ける職場であることが要件となるが、そこでは同僚や先輩も長期間働き必然的に独身が多くなろう。そこが基準になると、結婚や適齢期規範に沿う価値が低くなると考えられる。つまり、女性の就業は、経済的自立だけでなく、同僚や友人の結婚行動を通して、結婚規範や適齢期規範を変化させることが示唆された。

一方で、『親孝行』の価値は、世代にかかわらず、また、就業など経済的要因にもかかわりなくみられる価値であった。「母親のようにになりたい」という心理的一体感は、その親の価値観や期待を実現しようとする方向に働くと思定される。本研究では、それを『親孝行』と命名し、それは世代にかかわらず見られた。Kağıtçıbaşı (2007)は、経済的に発展しても集団主義的文化においては緊密な関係性が望ましいとされるため、親から子への経済的依存は減っても心理的には依存的な親子関係を作るような子育てをし、その結果、子どもの生き方は親から自律的であっても心理的には依存的な親子関係になるとしている。親の期待に応えよう、喜ばせようとする、心理的『親孝行』をこのような子育ての結果であると考えれば、結婚の価値には女性の就業や恋愛結婚化という社会的レベルの要因と、親子関係という個人的レベルの要因が関連するといえるだろう。

#### 4. 結婚の価値と経済的依存

Kağıtçıbaşı (1989)と柏木 (2003)は、親子関係において、世代間の経済的依存関係は世代間の相互依存的人間関係と関連するとしている。また、夫婦間においても、経済的一体感が高いほど心理的一体感が高いことが報告されており(柏木・永久,1999)、家族間では、経済的依

存と心理的依存が関連することを推測させる。そこで、結婚においても経済的依存と心理的依存の関連がみられるかを、将来にわたって仕事をする予定のなかった50dと、仕事と子育てを両立してきた母親をモデルに、子育て一段落後にパートで再就職を予定した50cの比較から検討した。

50dは大学卒業後地元で就職したが、仕事は単調で長く続ける仕事ではないと思い、結婚したいと思っていた。東京と地元の2人の男性から結婚を申し込まれたが、地元から出て刺激のある東京で新しい生活できること、社会で活躍するという自分ができない経験を聞きその疑似体験を通して成長できる気がすることに価値を認め、東京の男性と結婚することにした。頼りがいのある人に守られて生きられること、引っ張っていってもらえることは結婚の重要な価値だった。結婚後働くつもりは全くなく、結婚によって親から自立でき、結婚で自分の経済が持てると考えていた。自分の家族を築くという目標が持てることに価値を認め、夫や子どもを支えることが自分のステイタスだと、主婦になれることにも価値を認めていた。一方50cは、大学卒業後就職した会社の仕事はそれなりに面白かったが、適齢期になると母親からの結婚圧力が強くなった。友人の結婚でも焦りを感じ、子育てしながら仕事をばりばりとやっていた母親のようになるのが自分の目標であったこともあり、「結婚のための恋愛」に価値を認めるようになった。見合いと恋愛の両方で結婚相手を探し、やりたいようにやらせてくれる人で、居心地がいいこと、家事ができて自立しており将来自分が働きやすいことにも価値を認めて結婚することにした。自分が頼るといよりも、自分がやりたいことを支えてくれることに価値を認めていた。

この2人の比較からは、結婚後の仕事の将来展望は、経済だけでなく心理的依存関係をも左右する心理的プロセスになり得るであることを推察させる。家庭外で働くことは個人としての経験や成長の機会を家庭外に得ることでもある。その生き方を志向する場合は自分のやりたいことや意見など『自分が尊重される』価値が高くなり、両立のしやすさに結婚の価値を認めることになろう。一方、家庭外で働く見通しを持たず専業主婦を志向する場合には、夫婦は経済的に一体と考えざるを得ないだけでなく、成長や経験の機会が限られるため、自分の成長や経験、社会的地位についても夫と自分を同一視することを求め、心理的にも一体と考えるようになると推察される。経済的自立が可能な女性が若い世代ほど増加することを考えれば、「頼れる」より「二人で支え合う」「自分が尊重される」価値が重視されるようになるものと思われる。

## 5. 結婚の価値と子どもの価値の関連

『子どもを持てる』はどの世代でもみられた。今日でも子どもは結婚の重要な価値であり、多くの人にとって、結婚には配偶者だけでなく子どもを持つことも含まれているのであろう。このことは、結婚の価値が子どもを持つ価値と類似することを予測させる。

母親にとっての子どもの価値の調査では、『情緒的価値』『自分のための価値』『社会的価値』という積極的価値と、『条件依存』『子育て支援』という消極的価値があることが報告されている。

る(柏木・永久,1999)、『情緒的価値』は「年をとった時子どもがいないと寂しい」「子どもがいると生活に変化が生まれる」「年をとった時子どもがいると安心」などの情緒的満足を家族に求める価値である。『自分のための価値』は「子育てがしたかった」「子育ては生きがいになる」「子育てで自分が成長する」など、新たな役割を持つ経験や自己の成長に認める価値である。『社会的価値』は「子どもを産み育ててこそ一人前」「結婚したら子どもを持つのが普通」「姓やお墓を継ぐ者が必要」など、社会の側の規範に沿う価値や親からの期待に応える価値であった。また、『条件依存』は、「経済的ゆとりができた」「自分の生活に区切りがついた」「夫婦関係が安定した」など、個人としての生活が維持できる見通しや、目標を達成して自分の生活に区切りをつけることで、個人としての自分との折り合いがつけられることに価値を認めるものであった。

これらの子どもの価値は、本研究で見出された結婚の価値とほぼ対応している。すなわち、安心感などの情緒的満足を家族に求める[安心感と居心地のいい関係][恋愛結婚]は『情緒的価値』と、[自己の経験と成長]は『自分のための価値』と、[結婚規範・社会的価値]は『社会的価値』と、[個人としての自分との折り合い][経済的基盤]は個人としての生活や経済的余裕を重視する『条件依存』と対応する価値と考えることができる。

以上のことから、本研究で析出された結婚の価値のカテゴリーは、結婚と子どもを包含した家族を持つ価値を研究する際の枠組みとして有効であると思われる。

## 6. まとめと今後の展望

本研究では、結婚の価値の枠組みとなるカテゴリーを生成し、結婚の価値の変化が、女性の就業や恋愛結婚の一般化という社会の側の変化と密接に関わること、一方で、『自分の家庭を築ける』『成長の契機としての結婚]など[自己の経験と成長]の価値や『親孝行]は、個人的関係性に基づく価値で、世代による違いがみられないことを示唆した。さらに結婚の価値は子どもの価値との対応がみられ、これらの価値の枠組みは家族を持つ価値の枠組みとしても有効であることが示唆された。

家族を持つことは、個人にとってプラスの側面だけでなく、負担や制限といったマイナスの側面もある。本研究で結婚のマイナスの側面についての言及が少なかったのは、結婚にプラスの価値を認め、結婚することを選択した既婚者のみを対象としたためと推察される。今後、未婚者からのデータを追加して分析し、晩婚化の研究に有用な枠組みを作ることが必要である。

## 引用文献

伊藤裕子・相良順子・池田政子 (2004) 既婚者の心理的健康に及ぼす結婚生活と職業生活の影響 心理学研究,75(5),435-441.

岩澤美帆 (2010). 職縁結婚の盛衰からみる良縁追及の溢路 佐藤博樹・永井暁子・三輪哲(編著) 結婚の壁 晩婚・非婚の構造 東京:勁草書房

- Kağitçibaşı, C. (1989). Family and socialization in cross-cultural perspective: A model of change, In Berry, J.W., Draguns, J.G. & Cole, M., *Nebraska Symposium on Motivation 1989 Cross-Cultural Perspectives*. 135-200.
- Kağitçibaşı, C. (2007). Family, Self, and Human Development Across Cultures Theory and Applications. Turkish Academy of Sciences. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- 柏木恵子 (2003). 家族心理学 東京：東京大学出版会
- 柏木恵子・永久ひさ子 (1999). 女性における子どもの価値—今、なぜ子を産むか— 教育心理学研究, 47, 170-179.
- 国立社会保障・人口問題研究所 2011 第14回出生動向基本調査独身者調査  
[http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14\\_s/doukou14\\_s.asp](http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14_s/doukou14_s.asp)
- 水落正明 (2010). 男性に求められる経済力と結婚 佐藤博樹・永井暁子・三輪哲 (編著) 結婚の壁 晩婚・非婚の構造 東京：勁草書房
- 永久ひさ子・柏木恵子 (2000). 母親の個人化と子どもの価値—女性の高学歴化, 有職化の視点から— 家族心理学研究, 14, 139-150.
- Strauss, A.L., & Corbin, J. (1990). Basics of qualitative research: Grounded Theory Procedures and Techniques. Sage Publications. (ストラウス, A.L.・コービン, J. 南裕子 (監訳) 操 華子・盛岡 崇・志自岐康子・竹崎久美子 (訳) (1999). 質的研究の基礎—グラウンデッド・セオリーの技法と手順 第2版— 東京：医学書院)
- 山田昌弘 (2000). 結婚の現在の意味 善積京子 (編) 結婚とパートナー関係 問い直される夫婦 京都：ミネルヴァ書房

(2012.9.26 受稿 2012.10.15 受理)